



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

6

島崎藤村(一)

中央公論社

日本の文学 6

©1964

島崎藤村(一)

昭和39年6月15日初版発行
昭和39年6月16日再版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

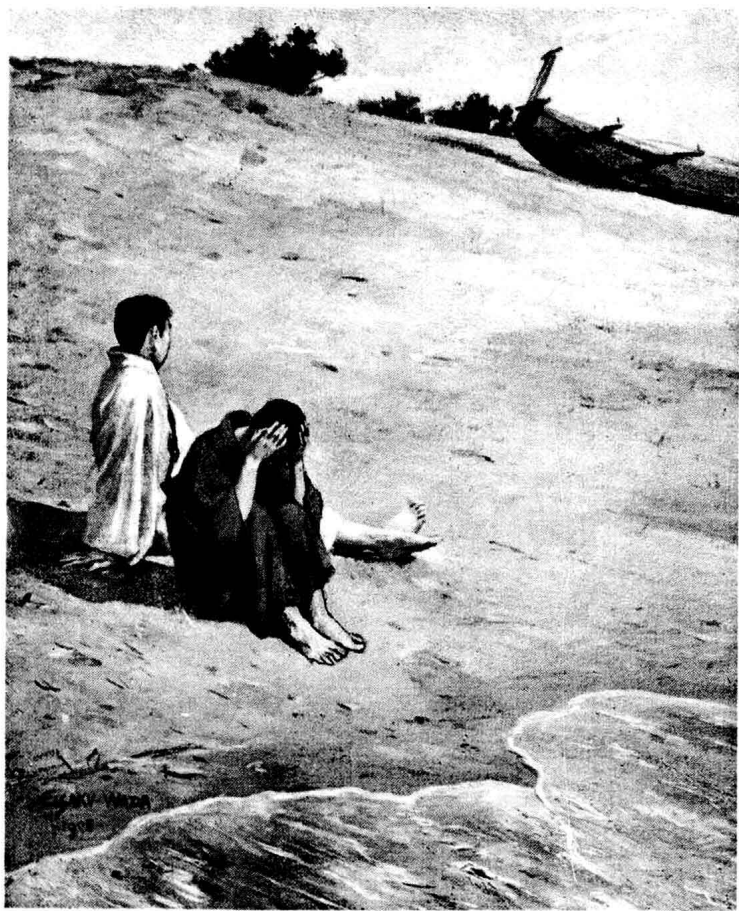
本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34



藤村肖像 有島生馬画



「春」 和田英作画

目次

藤村詩抄

若菜集より

一葉舟より

夏 草より

落梅集より

破 戒

春

千曲川のスケッチ抄

446 271 58 41 31 26 6 5

注	解	年	口	挿	カ
解	説	譜	絵	画	ット
			藤村肖像		
			〔春〕		
			〔藤村詩抄〕		
					〔破戒〕
					〔春〕
					〔千曲川のスケッチ〕抄
井上靖			有島生馬	和田英作	中村不折
			横山大観	下村観山	石井鶴三
				名取春仙	有島生馬

島崎藤村
(一)

藤村詩抄

自序

若菜集、一葉舟、夏草、落梅集の四巻をまとめて合本の詩集をつくりし時に

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは、古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉飾り。伝説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帯びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壮大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆実なる青年なりき。その芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた偽りも飾りも

なかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。

詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦悶の告白なる。

なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に励まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か旧き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじゝ新しきを聞かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。

芸術はわが願ひなり。されどわれは芸術を軽く見たりき。むしろわれは芸術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

明治卅七年の夏

藤村

若菜集より

序のうた

心無き歌のしらべは
一房の葡萄のごとし
なさけある手にも摘まれて
あたゝかき酒となるらむ

葡萄棚ふかくかゝれる
紫のそれにあらねど
こゝろある人のなさけに
蔭に置く房の三つ四つ

そは歌の若きゆゑなり
味ひも色も浅くて
おほかたは嗜みて捨つべき
うたゝ寝の夢のそらごと

草枕

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにつけり

蘆葉を洗ふ白波の
流れて巖を出づること
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね侘び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらむ

われもそれかやうれひかや

野末に山に谷蔭に

見るよしもなき朝夕の

光もなく秋暮れぬ

想も薄く身も暗く

残れる秋の花を見て

行くへもしらず流れ行く

水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば

ゆふべの雲の雨となり

身を夕雨にたとふれば

あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして

風に吹かれて飄り

朝の黄雲にともなはれ

夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか

われは道なき野を慕ひ

*思ひ乱れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ

乱れて熱き吾身には

日影も薄く草枯れて

荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は

吹く北風を琴と聴き

悲み深き吾目には

色彩なき石も花と見き

あゝ孤独の悲痛を

味ひ知れる人ならで

誰にかたらむ冬の日の

かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば

空冬雲に覆はれて

身にふりかゝる玉霞

袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風^{ふう}勁^{きん}く

小川の水の薄氷

氷のしたに音^{おと}するは

流れて海に行く水か

啼^ないて羽^は風^{かぜ}もたのもしく

雲に隠るゝかさゝぎよ

光^{ひかり}もうすぎ寒^{さむ}空^{ぞら}の

汝^なも荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の

光もなく暮れ行けば

人めも草も枯^かれはてゝ

ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔うて行く人の

踏^ふめばくづるゝ霜柱

なにを酔^よひ泣^なく忍^{しの}び音^{おと}に

声もあはれのその歌は

うれしや物の音^{おと}を弾^ひきて

野末^{のすえ}をかよふ人の子よ

声調^{こゝろ}ひく手も凍^こりはて

なに門^{かど}づけの身の果ぞ

やさしや年もうら若く

まだ初恋のまじりなく

手に手を取りて行く人よ

なにを隠るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて

霜と霜との枯草の

道なき道をふみわけて

きたれば寒し冬の海

朝は海^{うみ}辺^べの石の上に

こしうちかけてふるさとの

都のかたを望めども

おとなふものは濤^{なみ}ばかり

暮^{くれ}はさみしき荒^{あら}磯^{いそ}の

潮^{うしほ}を染めし砂に伏し

日の入るかたをながむれど

湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の

岩に碎けて散れるとき

かなしいかなや冬の日の
潮うしほとともに帰るとき

誰か波路を望み見て

そのふるさとを慕はざる

誰か潮の行くを見て

この人の世を惜まざる

厓こゝみもあらぬ荒磯の

砂路にひとりさまよへば

みぞれまじりの雨雲の

落ちて汐しほとなりにつけり

遠く湧きくる海の音おと

慣れてさみしき吾耳おにに

怪しやものゝものの音おとは

まだうらわかき野路の鳥

嗚呼あゐめづらしのしらべぞと

声のゆくへをたづぬれば

緑の羽はねもまだ弱き

それも初音か鶯の

春きにけらし春よ春

まだ白雪の積れども

若菜の萌えて色青き

こゝちこそすれ砂の上へに

春きにけらし春よ春

うれしや風に送られて

きたるらしと思へばか

梅が香ぞする海の辺へに

磯辺に高き大巖おほいしの

うへにのぼりてながむれば

春やきぬらむ東雲しののめの

潮うしほの音遠き朝ぼらけ

たれかおもはむ

たれかおもはむ鶯*の

涙もこほる冬の日に

若き命は春の夜の

花にうつろふ夢の間*と

あゝよしさらば美酒にうまさけ

うたひあかさん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ

春を思へばひとしれず

からくれなるのかほばせに

流れてあつきなみだかな

あゝよしさらば花影に

うたひあかさむ春の夜を

わがみひとつもわすられて

おもひわづらふころだに

春のすがたをとめくれば

たもとににほふ梅の花

あゝよしさらば琴の音に

うたひあかさむ春の夜を

春は来ぬ

春はきぬ

春はきぬ

初音やさしきうぐひすよ

こそ別離を告げよかしわかれ

谷間に残る白雪よ

葬りかくせ去歳こぞの冬

春はきぬ

春はきぬ

さみしくさむくことばなく

まづしくくらくひかりなく

みにくくおもくちからなく

かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ

春はきぬ

浅みどりなる新草にあきよ

とほき野面のもしを画えがけかし

さきては紅あかき春花はるなよ

樹々の梢を染めよかし

春はきぬ

春はきぬ

霞よ雲よ動うごぎいで

氷れる空をあたゝめよ

花の香かおくる春風よ

眠れる山を吹きさませ

春はきぬ

春はきぬ

春をよせくる朝汐あさしほよ

蘆かさはの枯葉を洗ひ去れ

霞に酔へる雛鶴よ

若きあしたの空に飛べ

春はきぬ

春はきぬ

うれひの芹の根は絶えて

氷れるなみだ今いつこ

つもれる雪の消えうせて

けふの若菜と萌えよかし

潮音

わきてながるゝ

やほじほの

そこにいざよふ

うみの琴

しらべもふかし

もゝかはの

よろづのなみを

よびあつめ

ときみちくれば

うらゝかに

とほくきこゆる

はるのしほのね

おえふ

処女をとめぞ経ぬるおほかたの

われは夢路ゆめぢを越えてけり

わが世の坂にふりかへり

いく山河やまがはをながむれば

水静うづしづかなる江戸川の

ながれの岸はなづかにうまれいで

岸の桜はなざくらの花影に

われは処女をとめとなりけり

都鳥みやと浮く大川おほなはに

流れてそゞ川添の
白董さく若草に

夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重の

大宮内につかへして
清涼殿の春の夜の

月の光に照らされつ

雲を彫め濤を刻り

霞をうかべ日をまねく

玉の台の欄干に

かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の

耀くさまを目にも見て

ときめきたまふさまさまの

ひとのころもの香をかげり

きらめき初むる暁星の

あしたの空に動くごと

あたりの光きゆるまで

さかえの人のさまも見き

天つみそらを渡る日の

影かたぶけるごとくにて

名の夕暮に消えて行く

秀でし人の末路も見き

春しづかなる御園生の

花に隠れて人を哭き

秋のひかりの窓に倚り

夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて

大宮内の門を出で

けふ江戸川に来て見れば

秋はさみしきながめかな

桜の霜葉黄に落ちて

ゆきてかへらぬ江戸川や

流れゆく水静にて

あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世を経れば

若き命に堪へかねて